

第5回（福井）研究大会の概要

坂田 幹 男（福井大会実行委員会事務局長）

環日本海学会第5回研究大会は、1999年11月6日～8日の3日間、福井で開催された。初日の6日は、大会担当校である福井県立大学と福井県国際交流課の共催によって「地域づくり国際フォーラム」を開催した。国際フォーラムでは、作家の五木寛之氏の特別講演（漂流者の思想）と国際シンポジウムを企画した。

「21世紀北東アジアの地域開発と環境—資源・エネルギー・国際協力を巡って—」をテーマとした国際シンポジウムでは、韓国慶北大学教授の金泳鎬氏、中国科学院教授の牛文元氏、サハリ州行政府大陸棚開発部部長のパブロフ・G・ニコラエブナ氏、水産庁日本海区水産研究所の南卓志氏をパネリストに迎えて、本多健吉・現環日本海学会会長のコーディネートのもとで、それぞれの専門分野の立場から問題提起をしていただき、21世紀の北東アジアにおける地域開発のあり方について議論を深めた。

7日の研究大会では、8つの分科会において合計25の報告が行われ、活発な議論が行われた。今回の研究大会では、とくに朝鮮半島問題の特集を企画し、韓国からも会員の参加と報告をお願いした。とくに、韓国東北亜経済学会との学术交流の一環として、3名の研究者の参加と報告をいただいたことは、両学会の学术交流が着実に進展していることのあかしとして喜ばしい限りであった。

8日のエクスカージョンには、30余名の参加をいただき、東尋坊・越前海岸を經由して敦賀港を視察するとともに港湾の現状と将来計画について説明を受けた。

今回の福井大会が、120名を越える参加者を得て、過去最大規模の全国大会となったことは、実行委員会として一応の責任を果たせたものと安堵した次第であ

るが、反省すべき点も多々あった。国際シンポジウムでは、時間の制約によって十分議論が尽くされたとはいえず、とくにフロアーからのご意見をうかがうことが出来なかった。研究大会では、特定の分科会に参加者が集中し、運営上のまずさがみられた。環日本海学会が、学際的な学会である以上、やむを得ない面もあるが、今後は運営上の工夫が要請される。とくに、これまでの大会にもみられたように、大会参加者数と報告者数との間に大きなギャップがある現状では、研究大会のあり方そのものに対する根本的な見直しが必要になっているのではないだろうか。

いずれにせよ、会員数300名強の小規模な学会であるからこそ可能な全国研究大会のあり方を真剣に考えてみる時期にきているのではないかと痛切に感じている次第である。今後会員の皆様からのご意見やご批判をいただければ幸いである。

「かつての熱意に水を差すような昨今の状況下でこの学会にとって必要とされることは、結果を急がず、腰を落ち着いた冷静な学術研究と、その面での国境を越えた交流を進めることで、新しい『雪解け』に備えることでありましょう」というのは、福井大会実行委員長で現会長の本多健吉氏の大会開催にあたってのご指摘であるが、まさにこのような学会のあり方を今後も着実に積み重ねていきたいものである。

最後になったが、福井大会の開催に当たっては、福井県国際課に国際フォーラムの共催をお願いし、福井経済同友会・福井商工会議所・敦賀商工会議所・北陸環日本海経済交流促進協議会・福井放送・福井テレビのご後援をいただいた。この場を借りてあらためてお礼申し上げる次第である。